臨床検査を創り育む

◎松尾 収二[1)]
公益財団法人 天理よろづ相談所病院[1)]

掲げたテーマは、教育講演には馴染まないかもしれませんが、“教育”とは教えられ育てられることと理解しています。私は、これまで、多くの臨床検査技師の方から多くのことを学びました。今回の講演は、そのお礼と受け取って頂ければ幸甚です。

「臨床検査(室)は生き物である」

臨床検査(室)は生き物です。臨床検査(室)を創るということは、ある意味、子育てのようなものかもしれませんが、これが、意外に難しいです。でも明るく元気育てば、その喜びはたとえようがありません。検査室を管理するということは、そこには、文化というか、気風というか、魂を吹き込むことであり、これが「創り育む」ことのように思います。

「臨床検査の最近の話題から「創る」ということを考える」

1. “精度管理”から診療の質向上をうたう臨床検査へ

法律の改正によって精度管理の基準が明確化され、検体検査に光を当てたようにみえますが、その内容は、長く衛生検査所に適応されてきた、まる適マークを整理したものであるように見えます。“精度”管理から脱却するチャンスでしたが、過去に戻ってしまいました。極異常値速報の義務化、異常値の抽出とそれに対するコメント、コンサルテーションの勧奨など医療の質向上に資するという気概を示して欲しかったです。

2. タスクシフト／タスクシェアからタスクエクスパンション(task expansion)へ

タスクシフト／タスクシェアは、臨床検査技師の業務拡大に弾みを付けましたが、妙に誇示されているように見えます。職種間の役割分担を整理することは必要ですが、並行して、自分たちの存在意義はどこにあるのか、やるべきこと、やりたいことは何かを問い続けて欲しいです。臨床検査技師は高い技量と志を持つ職種です。shift や share だけでなく、内から広げる expansion（expand)を期待しています。

3. 医師に気づきを与え、行動変容を起こす能動的臨床検査を創ろう。

“検査相談”や“コンサルテーション”の必要性は大いにありますが、これらは受け身の仕事です。骨髄検査、細胞診、生理検査等のコメントも受け身の仕事です。これからは、依頼内容の吟味、異常値の抽出とこれに対するコメントや追加検査の提供など一歩踏み込んだ対応を考えましょう。そして、問診、診察、そして治療にも関与し、「当たり前のことが当たり前にできる」診療に参画されることを望みます。

「演者の最近の仕事からみた臨床検査(技師)への新たな期待」

1. 体育・スポーツに資する臨床検査

演者は、天理大学ラグビー部のチームドクターとなり、新型コロナ感染対策やアスリートの健康管理・パフォーマンス向上を目的として血液検査を行っています。屈強なアスリートは、一見、肝障害、腎障害、低血糖など病気を思わせる検査データを示します。病人の検査データでは味わえない臨床検査の奥深さを感じつつ、体育・健康増進、体調管理など新たな領域での有用性を感じています。

2. 行政／公衆衛生における臨床検査技師の必要性

新型コロナの感染対策の中で、保健所や行政の方々と接しましたが、そこには臨床検査技師はいませんでした。臨床検査技師は、検査だけでなく、感染対策そのものにも大いに活躍できると思います。臨床検査技師は仕組みをつくることにも長けています。行政／公衆衛生にも大いに活躍できると確信します。

「さいごに」

臨床検査(室)は生き物です。「臨床検査(室)を創り育む」ということは、「自分を創る」人生の中でできることのように思います。そして、「創る」と言うことは「魂」を入れること、これが私が“教育”から学んだことです。

連絡先－0743-63-5611（代表）